読書

目利きが選ぶ今週の3冊

（★★★★★これを読まなくては損をする、★★★★読みごたえたっぷり、お薦め
★★★読みごたえあり、★★価格の価値はあり、★話題作だが、ピンとこなかった）

二宮清純　スポーツジャーナリスト

来るべき精神分析のプログラム
十川幸司著

精神分析の理論は19世紀末、フロイトにより生み出された。その根本は普遍的だが細部には耐用年数を過ぎた点があると著者は言う。精神分析の「更新」をはかった野心作。（講談社・1600円）　★★★★

転職は1億円損をする
石渡嶺司著

転職すれば成功すると思われがちだが、転職には大きなリスクが伴う。失敗談とデータを交え、危険性を指摘する。「転職は慎重に」。転職支援会社のコピーが重い。（角川ｏｎｅテーマ21・705円）　★★★

医者が秘密にしておきたい病気の相場
富家孝・伊藤日出男著

（青春新書・七六〇円）　★★★★

小谷真理　ファンタジー評論家

山羊の島の幽霊
ピーター・ラフトス著

（ランダムハウス講談社・一、八〇〇円）　★★★★

エイリアン・テイスト
ウェン・スペンサー著

70年代ＳＦを席巻した平井和正の〈ウルフガイ〉を彷彿とさせる青年が、クールな美人ＦＢＩ捜査官とエイリアン事件を捜査する。ロマンチックな佳作。赤尾秀子訳。（ハヤカワ文庫・860円）　★★★★

黒十字サナトリウム
中里友香著

シベリアの療養所では、吸血鬼幻想が蔓延していた……。センチメンタルなエピソードと自由奔放な考察が絡み合い、少女マンガを思わせる独特の幻想世界が堪能できる。（徳間書店・2000円）　★★★

縄田一男　文芸評論家

華族夫人の忘れもの
平岩弓枝著

「新・御宿かわせみ」第２集。新旧の時代の狭間から浮かび上がる様々な事件と人間模様を巧みに描く。巻末の「西洋宿館の亡霊」で早くも一つの山場を迎えることに。（文芸春秋・1400円）　★★★★

江戸の備忘録
磯田道史著

（朝日新聞出版・一、三〇〇円）　★★★★★

捨て首
庄司圭太著

「岡っ引き源捕物控」第９弾。次々と晒される生首の背後に見え隠れする比丘尼集団と地獄絵の謎。事件は幕閣の秘事をはらみ、シリーズ最高のスケールと面白さを持つ。（光文社文庫・619円）　★★★

医者が秘密にしておきたい病気の相場

ヤブ医者の多い病院ほど儲かる――。医療界の人間からこう聞いたことがある。評判が悪くなって客足が落ちれば利益は減ると思っていたが、事はそう単純ではないらしい。本書はこう明かす。〈腕のいい医者が治療して患者が早く退院すると、治療期間が短い分、請求できる医療費は少なくなる。一方、患者の回復が遅くて入院が長引くほど、医療費は多く請求できる〉。そういう仕組みだったのか。

日本人の死因の一位はがんである。トップは肺がんだ。早期発見のために、まず何をすべきか。真っ先に思い浮かぶのがレントゲン検診である。ところがこれ、逆効果の疑いがあると著者は指摘する。〈毎年定期的に肺がんの検診を受けたグループと、もう一方は、肺がんの検診を一切受けないグループの追跡調査をしたところ、肺がん検診を受けたグループのほうの死亡率が高かったという調査結果が出た〉。

思わず「ウソだろ？」と声を出しそうになってしまった。後の説明を読んで納得したが、私たちは病気について、治療について、そのコストについて、あまりにも無知である。「賢い患者」の増加こそが医療技術の進歩を促すのだろう。（二宮清純）

「賢い患者」こそが医療を進歩

本書の主人公の場合、妻の死によって幸せの絶頂から突き落とされ、絶しかいない無人島。そのつまずきが致命的だった。

るうちに無人島にいた幽霊に頼みごとをされる。この幽霊、どうせ死ぬなるのにいつまでも到達できないカフカ的な不条理だな、と苦笑していると、不思議な魅力満載の傑作だ。甲斐理恵子訳。（小谷真理）

達意の文章に激しい

確かに個々の文章は過去を訪ねてそれを未来へつなげる、という一貫性を持っている。

が、著者が「この人物が、この国にいたというだけで、どこか心がすくわれる」という上杉鷹山のことを「このまっしぐらな大名には」と形容した時、この言葉が規定する鷹山の人物像はその事蹟とあいまって、激しいほどの感動とともに、私たちの心を駆けぬける。

戦争下における中里介山の反戦詩を経て確実に未だ流血が止むことのない世界への祈りへとつながっている。さらに江戸時代の出産を語りつつ現代の少子化対策に触れ、「国家や大人のために子供がいるのではなく、子供のために国家や大人がある」のだと決然といい放つ箇所も忘れられない。

著者が志の人であることが何度も私に涙を流させるのだ。（縄田一男）